

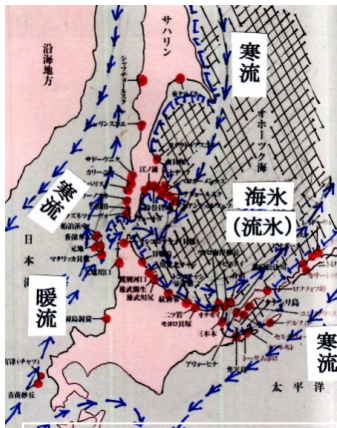
オホーツク文化の変遷・盛衰と気温変動との関係

村松 照男（一般）

1. はじめに

「オホーツク文化とは、およそ日本の古代を中心とする時期（5～13 世紀）にオホーツク海南岸一帯、すなわち、サハリン南部から北海道北部・東部そして千島列島に展開した海洋の民、海洋狩猟民族が作り上げた文化、生活様式である」（文献 1）。

この独特な北海道の古代文化圏が第 1 図で示されているようにサハリン南部、北海道北端部、オホーツク海沿いのごく狭い限られた地域、そして千島列島南部に限られ、オホーツク海の海水の領域（流水野）



第 1 図 オホーツク文化の遺跡分布と海水の最大域、周辺の海流。

の広がり（流水野）の外縁部に位置していることから、その盛衰、拡大・成熟・衰退など節目・節目に海水域の変動に密接に関係する気温を主な要素としての変動との関係を、日本を含む東アジアのデータで対応を求めた。

2. 北海道の土器文化の変遷

6～7 世紀の北海道の土器文化の分布とその前後の変遷を図 2 に示す。オホーツク文化は 4 世紀以前、サハリンには鈴谷式土器が分布しその流れを組んだ文化圏が 4 世紀になって北海道北端部から利尻・礼文、サハリン南部に広がりオホーツク土器という独特な文化圏を形成した。

オホーツク文化人の埋葬は土器を被った（被甕：かぶりかめ）屈葬（後に伸展葬）で、頭が向けられた方位が北西に向くなど特異であり、大型竪穴住居跡は縦長の六角形の特徴を持ち、オホーツクビーナス というセイウチの牙から

作成された女身像など、海洋狩猟民族の特徴を備えており 漁労、海産物の採集という土着の続縄文土器文化とは全く異なった文化である。

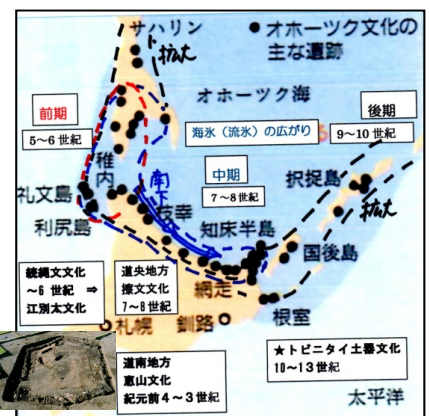
日本列島が縄文式土器から弥生式土器時を経て古墳時代を迎えた 4 世紀頃、オホーツク文化がサハリン南部、道北北端半島に進出、6 世紀からオホーツク海沿岸沿いに網走、知床に拡大、そして 9 世紀ころから、北海道の道央から全道的に広がった擦文文化と道東で重なりあって融合し始めトビニタイ土器文化に変貌しながら中国の元がサハリンに進出した 1264 年を境に姿を消していった。

4. 紀元後 14 世紀までの気候変化とオホーツク文化の盛衰・変遷と気候変化の対比

オホーツク海の海水の北海道沿岸における広がり（海水の密度）とオホーツク海沿岸の北見枝幸、紋別、網走の 3 地点の冬季の平均気温との逆相関、すなわち平均気温が上昇するにつれて海水域の減少が明瞭（文献 x x）となっており、気象衛星を用いたオホーツク海域の海水の広がり（流水野）の統計結果も同様の結果を得ている。この関係を調べる目的で紀元後の気温変動で動を少なくとも 14 世紀までの長期間、連続的な記録として解析されたものを主にデータを求めた。

(1) 屋久杉の年輪の C_{14} 放射性同位元素解析による記録。(2) 尾瀬沼の泥炭層のコアから解析されたハイマツの花粉分析による気温変動。(3) 中国河西廊に沿うキレン山脈ドゥンデ氷帽（標高 5300m）のアイ

第 2 図 オホーツク文化の盛衰および、北海道における土器文化の分布、居住跡。



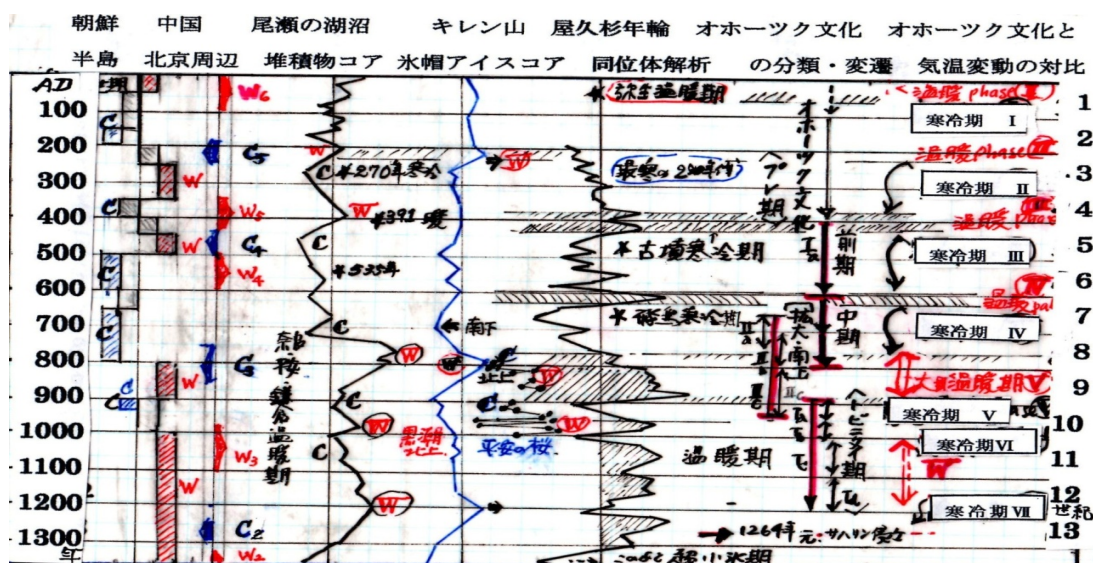
スコアの（安定同位体比）から復元した過去 2000 年の気温変動。(4) (3)の地点から南 200 km 付近の同期間の気温変動 (5)中国北京付近の過去 2000 年の気温変動 (6)北京 Shihua 石筍の成長速度から推定された夏季気温変動、中国中部 Wangxiang の石筍の酸素の同位体比を用いたモンスーン、降水量変動。(7) 朝鮮半島の三国史記など古記録を解析をもとに気温変動を解析した資料。(8)平安時代の京都の桜の開花時期の統計資料。(9)海洋堆積物から推定された日本周辺の黒潮の変動、等のデータを用いて気温変動と盛衰・変最も重要な 4 世紀～5 世紀への遷移との関係を調べた（第 3 図）。

主な特徴点は、3 世紀半ば、200～240 年頃から始まった古墳寒冷期のなか 4 世紀から 5 世紀に変わる 400 年頃を境に大きな変化となったが、この時期第 3 図で見られるように、寒冷期 II と寒冷期 III を挟んで温暖期 II が存在する。寒冷期 II は 8000 年前の縄文時代の最も高温の後の気温低下の低温の極と呼ばれている寒冷の時代で中国ではが漢が滅びて小国乱立、三国時代を迎え、日本でも卑弥呼雄時代であった。そして一旦温暖期 II の後、再び寒冷期 III を迎えて、オホーツク文化が道北端に移ってきた。600 年頃を境にして土器も遷移し勢力圏がオホーツク海沿いに網走。知床まで拡大した時期は、温暖期 III を挟んで寒冷期の IV の 7 から 8 世紀に対応してきた。さらに、8 世紀半ばを境からにそれ以前は寒冷期（万葉寒冷期）9 世紀を中心に温暖期

(V) では 40N に近い、ほぼ同緯度のドゥンデ氷帽のデータでは偏西風の北上を示す高温を示し、尾瀬のコアデータや平安時代の桜の開花など比較データも東アジアで顕著な温暖化を示している。この温暖期 V が過ぎた 900 年ころに寒冷期 V となり、オホーツク文化は千島列島。サハリンに拡大するとともに、まとまりがなくなり、北海道の道央から拡大してきた擦文文化圏との接点、道東において融合が進み始め、その後のトビニタイと土器の文化拡大への遷移を始めた。最終的には寒冷期 VII の後の温暖期 VII を過ぎて中国の「元」の 1264 年のサハリン進出後、13 世紀には急速に姿を消した。

6. まとめ

「オホーツク文化」とは、日本の古代から中世にあたる 5 世紀から 13 世紀の時期、オホーツク海に面するサハリンから北海道北部～東部、千島列島南部に展開した、海洋の民、海の狩猟を生業とした氷民文化 でその盛衰・遷移はオホーツク海の海水の広がり、すなわち平均気温の変動、気候変動と密接野と密接に関わることがわかった。とくにその盛衰。遷移の節目節目は、温暖期を挟んで寒冷期、海水の拡大期に著しい変化遷移過程となるとい対応関係が繰り返された。北海道には現時点ではこの期間の気温の連続記録がないが、道内の湖沼の堆積物の調査が進められており、その結果が期待される。



第 3 図
オホーツク
文化の盛衰
遷移と気温
変動・気候変
動との対比。